



# 兵庫県教育会による小学校教員の「支那満鮮視察旅行」に関する研究-「満州国」建国前を中心として-

宋, 安寧

---

(Citation)

研究論叢, 15:29-42

(Issue Date)

2008-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/81008654>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81008654>



# 兵庫県教育会による小学校教員の「支那満鮮視察旅行」に関する研究

—「満洲国」建国前を中心として—

宋 安寧 (神戸大学大学院総合人間科学研究科博士後期課程)

## I はじめに

日露戦争直後の1906(明治39)年から1940(昭和15)年にかけて、小学校教員の「支那満鮮視察旅行」<sup>1</sup>が外務省、文部省、帝国教育会、道府県教育会、鉄道局、新聞社などの多様な機関によって行われ、とりわけ道府県教育会が最もこの事業に力を注いでいた。本稿では、「満洲国」<sup>2</sup>建国前に兵庫県教育会が実施した小学校教員の「支那満鮮視察旅行」を考察する。

研究対象として兵庫県教育会を取り上げる理由は、兵庫県教育会が小学校教員の「支那満鮮視察旅行」を持続的に実施しており、本視察旅行の歴史の変遷を踏まえ特質を把握することができる好個の素材であるからである。小学校教員の「支那満鮮視察旅行」を実施した地方教育会は多かったが<sup>3</sup>、管見のかぎり1928(昭和3)年から1940(昭和15)年まで中断することなく毎年実施していたのは兵庫県教育会だけであった。この時期は満洲事変の勃発(1931年)、「満洲国」の建国(1932年)、日中全面戦争への突入(1937年)というように日中関係が悪化の一途を辿った時期であった。したがって兵庫県教育会の事例を取り上げることにより、小学校教員の「支那満鮮視察旅行」が日本の植民地支配政策(とくに対中国大陸支配政策)の変化とともに、どのように変化していたのかをみるのが可能となる。

小学校教員の「支那満鮮視察旅行」に関する先行研究では断片的な指摘にとどまり、とくに道府県教育会の実施状況についてはまったく言及されてこなかった<sup>4</sup>。このような研究の空白を払拭するために、道府県教育会による実施を取り上げなければならないと考える。

対象とする時期として「満洲国」建国前に注目する理由は、兵庫県教育会による小学校教員の「支那満鮮視察旅行」の開始にあたる時期であったため、本視察旅行の全体像および各時期の変化を解明するには、まずこの時期の視察旅行を明らかにしなければならないと考えていたからである。

兵庫県教育会による小学校教員の「支那満鮮視察旅行」の企画は、1927(昭和2)年12月の郡市教育会長会で討議され、必要な費用を県教育会、郡市教育会、町村学校がそれぞれ1/3ずつ補助することが決められた<sup>5</sup>。1928(昭和3)年にいたると、兵庫県教育会に対する県の補助金が1000円増額され、本視察旅行の開始を促したのである<sup>6</sup>。

しかしながら、本視察旅行を実施してから3年目の1930(昭和5)年にいたると、財政難を考慮して本事業の中止を求める反対意見が出されるようになった<sup>7</sup>。反対意見に対して、兵庫県教育会の主事で視察旅行団の団長を務めた森棟二は、「元来教育者は毎日教授に追われ研究上必要なる実地の調査研究視察が出来にくいのであります。故に本会がその斡旋役となつて之が派遣を企てることは誠に機宜に適したる企てであると信ずる」<sup>8</sup>と述べ、本視察旅行が有する教育的意義を強調し実施の必要性を主張した。森のほかにも土橋保が「之だけの大県の教育団体が時代に後れない様に海外の実情を視察することは当然なきねばならぬ事業である」<sup>9</sup>と述べたように、視察旅行が時宜にかなった企画であることを強調する意見が出され、視察旅行の意義を認め本事業の継続が支持された。こうして兵庫県教育会は、1928(昭和3)年から1940(昭和15)年ま

で一度も中断することなく合計13回にわたる小学校教員の「支那満鮮視察旅行」を実施することとなったのである。

本稿は「満洲国」建国前に実施された合計

4回の視察旅行を取り上げ、実施目的や視察日程の特徴、現地の人々との交流の実態を明らかにしたうえで、小学校教員が本視察旅行から学んだことを考察することを目的とする。

表1 小学校教員の「支那満鮮視察旅行」の視察者一覧

年度	視察者	所属	職名
1928(昭和3)年	森棟二	兵庫県教育会	主事
	岸原徳四郎	兵庫県	視学
	高谷一次	多紀郡篠山尋常高等小学校	校長
	西羅岩太郎	川辺郡川西尋常高等小学校	校長
	内尾政玄	神戸市林田商工実修学校	校長
	国分喜一	津名郡尾崎尋常高等小学校	校長
	生島芳三郎	武庫郡今津尋常高等小学校	校長
	北内久幸	多紀郡古市尋常高等小学校	校長
	小松白太郎	尼ヶ崎市第二尋常小学校	訓導
	梶原太寿郎	尼ヶ崎市尋常高等小学校	訓導
	滋谷治恵	尼ヶ崎市第一尋常小学校	訓導
	竹中庄作	明石市明石尋常高等小学校	訓導
	福井延一	有馬郡大沢尋常高等小学校	訓導
	喜多山一清	姫路師範学校附属小学校	訓導
河南貞雄	御影師範学校附属小学校	訓導	
1929(昭和4)年	森棟二	兵庫県教育会	主事
	山本貞之助	神戸市	視学
	入江栄太郎	宍粟郡神部尋常高等小学校	校長
	江口重吉	神戸市諏訪山尋常小学校	校長
	松田久之助	印南郡大塩尋常高等小学校	校長
	下仲幸吉	神戸市湊川尋常小学校	校長
	高島耕三	姫路市城南尋常小学校	校長
	谷口孫太郎	川辺郡稲野尋常高等小学校	校長
	米口高次	飾磨郡城陽尋常高等小学校	校長
	大西要	氷上郡芦田尋常高等小学校	校長
	徳平貞一	多可郡西脇尋常高等小学校	校長
	細見兵吉	神戸市平野尋常小学校	校長
	林春次	加古郡加古川尋常高等小学校	校長
	木本常吉	神戸市立第一高等女学校	教諭
稲見国松	神戸市須磨裁縫女学校	教員	
1930(昭和5)年	森棟二	兵庫県教育会	主事
	森本俊治	西宮市立安井尋常高等小学校	校長
	坂井利七郎	養父郡八鹿尋常高等小学校	校長
	鳥居直光	印南郡米田尋常高等小学校	校長
	長岡直孝	出石郡弘道尋常高等小学校	校長
鞍橋巳之助	神戸市神戸女学院	教諭	
1931(昭和6)年	森棟二	兵庫県教育会	主事
	絹巻彦蔵	多紀郡篠山尋常高等小学校	校長
	松井清助	印南郡大塩尋常高等小学校	校長
	榊圭三	神戸市菊水尋常小学校	校長
	前川清五郎	武庫郡住吉尋常高等小学校	訓導
	滝川昇	神戸市楠高等小学校	訓導
	三田圭市	姫路師範学校	教諭
	安藤則太郎	第三神戸中学校	教諭
金光英夫	加古川中学校	教諭	

[注]『兵庫教育』第465号(1928年7月15日)、122頁、同第481号(1929年11月15日)、100頁、同第489号(1930年7月15日)、175頁、同第503号(1931年9月15日)、63頁~123頁より作成した。

## I 視察者の人選と実施目的

### 1 視察者の人選

兵庫県教育会は視察地、期日、旅費、補助金、団員数、申込方、規則などを各郡市教育会、各学校団体、各種団体の会員に通牒し応募する方法を採用し、定員を超えた場合は兵庫県教育会の詮衡で最終的な視察者を決定した。1928(昭和3)年から1931(昭和6)年までの視察者の詳細を整理したものが前頁の表1である。

表1によると視察者には次の2点の特徴があった。第1点は、視察者のうち小学校長が最も多く、45名のうち24名で53%を占めていたことである。次いで小学校教員が9名、そのほかは県教育会主事、兵庫県視学、神戸市視学となっていた。1931(昭和6)年の場合は小学校教員だけではなく中学校教員が2名、師範学校教員が1名加わっていた。

第2点は、兵庫県教育会主事であった森棟二が4年連続で視察団の団長を務め、視察旅行に参加していたことである。その後1933(昭和8)年、1937(昭和12)年、1938(昭和13)年、1939(昭和14)年にも森は団長を務めており、兵庫県教育会が実施した小学校教員の「支那満鮮視察旅行」事業の中心的人物であった。また森は、兵庫県教育会による実施の以外にも1906(明治39)年の視察旅行<sup>10</sup>や1929(昭和4)年に帝国教育会が実施した視察旅行<sup>11</sup>にも参加していた。このように森が「支那満鮮視察旅行」に強い関心を寄せた理由は、「新領土に満八ヶ年……鮮地の鮮人英米佛人の学校をも監督指導など教育行政にも携わって来ました」<sup>12</sup>と述べたように、植民地における教育に経験と強い関心があったからであると考えられる。

### 2 実施目的

次に実施目的について考察する1930(昭和5)年10月4日の兵庫県教育会第26回

代議員会における小学校教員の「支那満鮮視察旅行」に関する議論によると、視察旅行の目的は「教育者の知見を広め教育上の研究調査を実地につき致す為行である」<sup>13</sup>と述べられており、小学校教員の知見を広げるとともに、教育に関する実地研究調査を行うことの二つであった。このうち「実地研究調査」とは「今まで書籍や話で聞いた所を実地につき視察する」<sup>14</sup>ことであった。

兵庫県教育会がこのような視察目的を定めたのは、他の道府県の実施によって触発されたからである。すなわち「此ノ種ノ催シハ全国各府県ニ於テモ其ノ価値ノ深甚ナルヲ認メ鮮滿支那ハ固ヨリ南洋欧米ニモ派遣スルモノ次第第二多キヲ加フルニ至レリ、之レ教育者ノ知見ヲ拡充スル上ニ於テ其ノ効果ノ渺ナカラザルモノアルガ故ナリトス本会ニ於テモ将来之ガ継続ノ重要ナルヲ感ズルモノナリ」<sup>15</sup>と述べられたように、兵庫県教育会は他の道府県によって認められた「教育者ノ知見ヲ拡充スル」効果に鑑みこれを実施の目的と定めたのである。

このように「教育者ノ知見ヲ拡充スル」ことは視察旅行のおおまかな目的であり、当時の一般的な傾向であった。では兵庫県教育会はどのように具体的な目的を規定したのだろうか。それについては次の3点を指摘することができる。第1点は、兵庫県教育会は海外を視察することによって改めて日本を認識することが小学校教員にとって重要であることを強調したことである。たとえば1929(昭和4)年の視察報告書である「鮮滿視察旅行記」では、「今や帝国の現状は思想経済両局面の行詰りである……日本人たるものは宜しく一步海外に遊んで而して静かに帝国の実像をながめるの要がある……殊に第二の国民教養の任にあるものにとっては、更に更に肝要な問題なのである」<sup>16</sup>と述べられており、昭和恐慌のなかで日本が直面する思想・経済面の問題を

視察旅行をとおして深く認識することは、次世代を担う子どもの教育を担当する小学校教員にとって最も必要であることが強調された。1930(昭和5)年の視察報告書である「支那江南の旅」では「旅行はその実地の踏査に依って異国の真相を了解し得るのみならず、我が日本の真の姿を知るには歩一歩海外に出て異国から故国をながむるに如くものはないのである」<sup>17</sup>という記述がみられ、表現こそ異なっていたが同じように視察旅行は海外を認識することだけではなく、海外を認識することをおして日本を改めて認識することが最終的な目的であった。

第2点は、教育に関する視察を行うことである。1930(昭和5)年の視察旅行の出発の際、神戸港で神戸新聞社の取材に応じ団長であった森棟二は、「上海を中心に教育状態の視察にでかけますが、上海で在支那唯一の日本人女学校の視察と徐家雁<sup>アウグスタ</sup>の天主教学校を是非みたい……新らしい支那は米国系ミッション教育が普及する一方随分思い切った教育方法を採用していますから得るところがあるか」<sup>18</sup>と述べ、視察旅行の目的は中国に設置された日本の学校の状況およびアメリカの教育方法を導入した後の中国教育の事情を視察するためであった。

第3点は、中国の事情を認識することである。これはとくに1931(昭和6)年の視察

旅行において強調された。「隣邦支那新しい支那謎の国といわれ今日世界注視の的となる国、これを実地に踏査して理解することの必要は今更論ずるまでもないことである。わけて第二の国民を教養するものに於ては更に其の必要が切である」<sup>19</sup>と述べられたように、視察旅行の目的は「謎の国」と言われ世界に注目される中国の事情を実地の調査によって認識することであった。前年度までと比べると、日本を見直すことが言及されておらず、中国自体を認識することが小学校教員にとって必要であることが強調された。

第4点は、イベントおよび教育関係の会議に参加することである。たとえば1929(昭和4)年の視察旅行は「朝鮮始政二十周年記念の大博覧会があつて全国教育大会も京城で開催せられたことであるから、旁々朝鮮全道を短縮して展観研究するの便益があつた」<sup>20</sup>と述べられ、京城で開催した博覧会および全国教育大会に参加することがこの年の視察旅行の目的に加えられた。

### Ⅲ 本視察旅行の実態

#### 1 多様な視察ルート

1928(昭和3)年から1931(昭和6)年までの視察ルートを整理したものが表2である。

表2 小学校教員の「支那満鮮視察旅行」の視察ルート

年度	期間	視察ルート
1928(昭和3)年	6月27日～ 7月15日	神戸⇒門司⇒台北⇒角板山⇒嘉義⇒台南⇒高雄⇒屏東⇒高雄⇒廈門⇒汕頭⇒香港⇒広東⇒香港⇒上海⇒長崎⇒神戸
1929(昭和4)年	9月27日～ 10月10日	神戸⇒下関⇒釜山⇒蔚山⇒慶州⇒大邱⇒京城⇒平壤⇒安東⇒奉天⇒撫順⇒奉天⇒大連⇒旅順⇒大連⇒門司⇒神戸
1930(昭和5)年	6月4日～ 6月16日	神戸⇒上海⇒寧波⇒紹興⇒杭州⇒上海⇒蘇州⇒南京⇒鎮江⇒上海⇒神戸
1931(昭和6)年	7月5日～ 7月21日	神戸⇒門司⇒青島⇒濟南⇒泰安⇒曲阜⇒濟南⇒北京⇒天津⇒塘沽⇒門司⇒神戸

[注]『兵庫教育』第466号(1928年8月15日)、3頁～19頁、同第481号(1929年11月15日)、101頁～105頁、同489号(1930年7月15日)、105頁～125頁、同第503号(1931年9月15日)、65頁～125頁より作成した。

表2からわかるように、視察旅行のルートは、それぞれ台湾・中国大陸沿岸部ルート（1928年）、「鮮満」ルート（1929年）、江南ルート（1930年）、山東北京ルート（1931年）と毎年異なっていた。

ではこれらの視察ルートはどのように決められたのか、またどのような視察目的が期待されたのかをみてみよう。まず1928（昭和3）年の視察旅行は「本県最初の試みであって随分思い切った大きな企であった」ため、そのルートが決まるまでかなりの苦労があったようである。計画当初は「揚子江沿岸案」「青島上陸案」「鮮満地方案」の三つが検討されたが、「支那動乱の影響」で最終的に「台湾南支」コースに決められた<sup>21</sup>。

1928（昭和3）年の視察ルートにおいて最も注目に値するのは次の2点である。

第1点は、台湾の角板山が視察ルートに加えられたことである。角板山は台湾の原住民である「蕃人」が居住しているところであった。日本が台湾を占領した後、台湾総督府は「蕃人」を開化させる必要性からインフラ整備をはじめとする「理蕃」政策が実行されていた<sup>22</sup>。角板山での具体的な視察日程は台湾総督府によって作成された<sup>23</sup>。「水田がひらけていて稲がよく出来ている。山腹の茶畑は丁度静岡県で見ると茶が立派に出来ていて蕃人の夫人子供がそこそこ耕している耕地でない処は植林がしてある」<sup>24</sup>と記されたように、台湾原住民の農園や台湾原住民の教育機関である「蕃童教育所」などが視察場所に加えられた。「我々の生蕃に関する概念の謬れることを実際に見ることができた。蕃界は原始的な生活から経済的生活への総督府の理蕃成績の良好なる実情、殊に蕃界に久しく住み込んで真剣に生蕃教化の為に献身的努力をせられ蕃人から父母の如く神の如く尊敬を受けていられる警察官の少なくないこと、此等に関して全く我々は邦家の為に之を慶し感謝する外はなかった」<sup>25</sup>との視察者の感想から推測される視察のねらいは、台湾総督府の「理蕃」業績および原住民の教育に対する日本人の貢献を視察者に認識させることであった。

第2点は、廈門と汕頭が視察ルートに加えられたことである。その目的は、この両都市と植民地台湾や日本との関係および現地日本人の活躍を視察者た

ちに認識させるためであった。たとえば廈門については、「我邦と古から深い関係があるが殊に台湾が我領地となってから一層密接になったのは申すまでもない。それは台湾の本島人は大抵福建省の人即泉州漳州あたりのものが渡台して来たからである。云わば本島人の母国であるからである。従って今でも廈門には台湾籍民が七千余人も住んでいて台湾総督府の公学校もあると云う理である」<sup>26</sup>と述べられたように、廈門が歴史上日本との関係および現在多くの台湾人が住んでいることから日本の台湾統治にとって重要であることを視察者たちに認識させるためであった。

汕頭については、視察者は「我が日本人の渡来しかけたのは明治三十七年、三五会社が潮州鉄道敷設工事請負当時のことである。それが今日では台湾人が漸次多く渡来して今では内地人台湾人を併せて五百余人になって居る。外国人では英の百二十名の九十五其他佛蘭露伊独等各十名内外位。故に其人員数から見ると日本人が優勢であるべきであるが、実際の活動勢力は矢張英国のものである」<sup>27</sup>と述べられたように、汕頭での各列強の勢力の対比から日本人の活躍がイギリスに及ばない現状を認識した。

1929（昭和4）年の「満鮮」ルートは、前述のように「朝鮮始政二十周年記念の大博覧会があつて全国教育大会も京城で開催せられる」<sup>28</sup>ことを考慮して決められたものであった。視察ルートを決定するにあたり、「京城往復案」「京城、金剛山、慶州案」「京城、平壤、安東案」「京城、平壤、奉天、旅順、大連案」「京城、平壤、奉天、チチハル、ハルピン、大連、旅順案」「朝鮮、満蒙、支那案」という6案が検討された。最終的に時間や旅費などを配慮して、「京城、平壤、奉天、旅順、大連案」が選ばれ、京城で博覧会および全国教育大会に参加した後「満洲」地方を視察することが決定された<sup>29</sup>。

1929（昭和4）年の視察旅行においては、この「京城博覧会」に参加したことが注目される。山路勝彦によれば、植民地で開催された博覧会は植民地統治の一環として行われたという性格を有していた<sup>30</sup>。

1929（昭和4）年に朝鮮総督府が主催したこの博覧会は、朝鮮統治20周年を記念するため同年9月12日から10月31日にかけて京城の景福宮において開催

され、朝鮮で行われた博覧会のなかでも最も大規模なものであった<sup>31</sup>。この博覧会の開催目的について、視察者は「始政二十年間の当地の実績を明らかにすると共に生産物の優劣事業の得失、施設の長短等を比較研究して将来の進歩を図る資料と致し又一般民衆をして周く新政の恵沢を知らしめ以て施政の円滑なる運用を助け……多数の観覧者を誘致して朝鮮の実視を乞い、一層朝鮮に対する正しき正解に下に、相携へて半島の開発に努め国運の進展に寄与せんとする」<sup>32</sup>と記録した。日本による朝鮮統治の業績を朝鮮内外にアピールするとともに、参観に訪れた日本人に対しては朝鮮産業の発達した状況を認識させることにその開催目的が置かれていたことがうかがえる。この博覧会に参加したある視察者は「内容を見てすべてが施政前と比し又施政後も目を追って進んで居てしかも夫等が統計的・数字的に展開され彼等新附の国民に親政の恵沢を充分理解せしめたるろうと思われた」<sup>33</sup>との感想を述べ、博覧会が朝鮮人民に日本の政策を理解させるうえで効果があるという認識を示していた。

1930(昭和5)年の視察旅行の場合は、「蔣か閻馮か、その勝敗の数たる全く列国の興味ある課題と云はねばならぬ。支那時局紛争のこの時に際し我が県教育会では民国政府の首都を目指して江南地方の視察を企てたのは全く面白い壯図と云はねばならぬ」<sup>34</sup>と視察ルートを江南地方に決めた。「蔣か閻馮か」とは、1928(昭和3)年に北伐を完了した蒋介石が中国国民党および自己の権力を強化させるため1929(昭和4)年1月から国軍の整理を開始し、旧軍閥の兵士を削減することにより軍閥の影響力を失わせ、1930(昭和5)年5月11日に閻・馮への総攻撃を命じ中原大戦が始まったことを指している<sup>35</sup>。内戦中の中国の状況を認識するため、当時の中華民国の首都であった南京を中心とする江南地方へのコースに決定された。なお視察都市のうち寧波と紹興の両都市は、それぞれ遣唐使が上陸した名所や銘酒の産地として上海を訪れた際に、上海領事館領事の推薦で臨時的に追加された<sup>36</sup>。

視察ルートの中心は上海、蘇州、杭州、南京であった。これらの都市にどのような視察目的が期待されたのか、あるいは視察者たちがどのようにこれら

の都市を認識していたのかをみてみよう。上海については、「デモクラシズムで人間の価値の上で等差を認められない感がある……社会主義でも何でも育って行く感じがする……政治は城内は支那特別市政府が執って居るが租界は外国の主権に属して居る。而して其の租界に住んで居る外人は勿論のこと中国人でも印度人でも朝鮮人でも自由と平等とが徹底して階級意識はない……東洋に於ける最も複雑にして尖端的で自由で平等な革命的な雰囲気漂う都市であることを感じた」との感想が述べられた<sup>37</sup>。この感想からうかがえるように、視察者は上海が列強に占領され各国の人々が雑居している現状をみていたが、列強の占領から目を逸らし自由平等な国際都市としてしかみていなかったのである。

蘇州については、「古来多くの碩学、鴻儒、美人、麗人を輩出せしめた処として支那人の憧れの都である。産物は豊かに民は富む南方文華の源泉であった二千年の歴史を有する」<sup>38</sup>と述べられ、杭州については、「隋、唐、呉、越、南宋、明、清の歴史、白楽天、蘇東坡、駱賓王等の風雅の知府刺史、その他幾多の詩人墨客の詩歌と史跡、さては建築、美術、宗教、風俗、人情の今に伝わるものの一として吾人遊子の心をそそらないものはない」<sup>39</sup>という認識を視察者は示した。つまり視察者は蘇州、杭州を中国の歴史と古典文化を代表する文化的な都市として視察したのである。南京も現地の領事館で中国の時局についての講話を聞いた以外、ほとんどの時間を史跡の視察および演劇の鑑賞に費やしたことから考えると、視察者は南京の政治的な位置づけを重視して訪問したというより、杭州や蘇州と同じように中国の文化都市として視察したといえよう。

このように、1930(昭和5)年の視察旅行では中国文化を理解するという目的が最も期待されていたのである。

1931(昭和6)年の山東北京ルートは、「謎」の中国を理解するため文化の中心地である北京を選定し、それに加え「従来戦乱などの為に行かれなかった地方即ち泰山曲阜等」<sup>40</sup>を加えて決定された。北京では兵庫県出身の軍人が駐在する関係から、陸軍北支那駐屯軍を訪問したほか、視察場所はすべて史跡であった。山東地方においても、孔子の故郷曲阜、儒

教の聖地泰山への視察が重視され、とくに申込みの手続きの煩瑣をいわず孔子の子孫である孔徳成に面会することができたことからうかがえるように、この年の視察旅行も中国文化を認識することが重視されたのである。

## 2 視察場所の特徴

視察者たちは各地でどのような場所を視察したのであろうか。視察場所を整理したものが次の表3である。

表3 小学校教員の「支那満鮮視察旅行」の視察場所数

年 度	史跡	教育機関	産業資源	官庁	戦跡	神社	軍隊	その他
1928(昭和3)年	12	15	11	5	0	3	0	5
1929(昭和4)年	22	5	6	1	9	2	0	6
1930(昭和5)年	42	6	1	6	0	0	0	5
1931(昭和6)年	36	4	2	2	4	1	1	5
合 計	112	30	20	14	13	6	1	21

〔注〕『兵庫教育』第466号(1928年8月15日)、3頁～19頁、同第481号(1929年11月15日)、101頁～105頁、同489号(1930年7月15日)、105頁～125頁、同第503号(1931年9月15日)、65頁～125頁より作成した。

表3によると、視察場所について次の3点の特徴を指摘することができる。第1点は、種類をみると史跡の数が最も多く合計112ヶ所であったことである。

1928(昭和3)年を除き、各年度においていずれも史跡の視察数が他の視察場所よりはるかに多かった。史跡が集中している江南地方や山東、北京地方を訪問した1930(昭和5)年と1931(昭和6)年はもちろん、植民地台湾と「満洲」、朝鮮を視察した1928(昭和3)年と1929(昭和4)年の視察旅行においても史跡が多く視察された。史跡の視察が最も重視されたことがこの時期の視察旅行の大きな特徴であった。

第2点は、植民地で教育機関や資源地の視察数が多かったことである。たとえば1928(昭和3)年の視察旅行において、それぞれ15ヶ所と11ヶ所を視察しており、他の視察場所数より多かった。

第3点は、戦跡をすべて視察したことである。戦跡は合計13ヶ所で他の視察場所と比べると多くはなかったが、戦跡がある視察地ではすべての戦跡を視察していた。1929(昭和4)年は旅順の日露戦跡と朝鮮の日清戦跡、1931(昭和6)年は青島の第一次世界大戦の日本とドイツの戦跡を視察した。

視察者たちはどのような場所を視察したのだろうか。

視察した史跡の主要なものをあげると、清の発祥地である奉天の北陵、杭州の浄慈寺、蘇州の寒山寺、南京の鶏鳴寺、曲阜の顔子廟、孔子廟、孔子の子孫衍公の邸宅、北京の雍和宮(喇嘛廟)、孔子廟、天壇、紫禁城、故宮博物院、万里の長城、十三陵、万寿山(頤和園)となる。これらの史跡は漢詩に詠まれた名所旧跡や儒教と関係していたものや古代の都であり、いずれも当時の日本人が憧れた中国古典文化の聖地であった。

これらの史跡を観て視察者たちは何を感じたのだろうか。山東、北京の史跡に対し、視察者は「聖廟至聖林紫禁城等の壯嚴拡大な規模と陳列せる尊い世界的至宝たる芸術品或は万里の長城明十三陵の雄大さには只々驚嘆するの外はない」<sup>41</sup>とその規模の雄大さに感銘を受けた。また故宮博物院を見学した視察者は、「陳列され又配置されてある支那古美術品調度品の繊細高雅なるを見ては日本人の手は他人より器用なりとか、日本は東洋の美術国なりなどの誇り、うぬぼれは許すことはできない」<sup>42</sup>という感想を述べ中国の美術工芸技術を高く評価した。視察者たちは中国の史跡を賞賛する一方、史跡の荒廃状態に対し慨嘆した。たとえば蘇州の寒山寺を訪れた視察者は、張継の漢詩「楓橋夜泊」に描かれた名勝へ

の憧れの気持ちをもって視察したが、実際彼らの目に映った寒山寺は、「昨年来た時には煉瓦門の中に軒の傾いた小さな堂があって箔のはげた仏像が安置ではなく倒れかかっていたがそれが今度は横に移されて仏像はすてられ碑石だけが残されている。黝い煉瓦の壊れた中には修繕の行き届かぬ殿堂が埋もれている。而して文徴明や張継の拓本のみを坊さんは売りつけるのである」<sup>43</sup>という荒廃した状態であった。

教育機関の視察については、視察者たちは主に台湾および「満洲」、朝鮮における原住民の子弟のための教育機関や現地に滞在していた日本人の子弟のための教育機関を視察し、初等教育機関が多かった。視察者たちは教育機関の視察から何を感じたのだろうか。台湾原住民の子弟のための教育機関である蕃童教育所と奉天中学校についての感想が注目すべきである。蕃童教育所について視察者は、「国語も話せるし平仮名の習字も立派であるし国語の唱歌もオルガンもひける算術もできる。此の様子から考えると蕃人の無智蒙昧は低能ではなく数千年来教育しないてばかりであったからで教化すれば教化可能の民族であることが十分分かった」<sup>44</sup>と、日本人の優越感情を露骨に表わしながら、日本が台湾に施した教育政策の合理性を強調した。

1929(昭和4)年に奉天中学校を視察した際、十周年記念の提灯行列を観た視察者は「奉天に於ける日本人が植民地根性を遺憾なく発揮していることが満蒙発展上幾多の支障を与えるものであるということを目撃させられた」<sup>45</sup>との感想を述べ、植民地に滞在する日本人の露骨な植民地意識が植民地支配に支障をもたらすものであることを憂慮した。

資源産業地の視察は、主に1928(昭和3)年と1929(昭和4)年の視察旅行で行われた。視察者たちは台湾の林業試験場、農業試験場、製糖会社、朝鮮の仁川港、「満洲」の撫順炭鉱、東亜油坊などを視察し、産業資源の規模や発展の状況などの詳細な情報を聴取した。「撫順セイルオイル工業の隆盛は我が国海軍に交通に至大の影響を来すものである。事業の拡大を将来に期せなければならぬ」<sup>46</sup>と視察者が感想を述べたように、植民地の産業資源が日本の発展を左右するという認識を視察者たちは持っていた。

視察した官庁は合計14ヶ所で、史跡、教育機関、

資源産業地の視察数と比べると多くはなかった。台湾総督府、朝鮮総督府、奉天の満鉄公所、寧波市政府、上海の外務省文化事業部事務所、北京の日本公使館を除き、すべてが各都市における日本領事館であった。官庁訪問の目的は、視察地に関する情報の聴取および視察旅行の手続きを処理することであった。

戦跡については、1929(昭和4)年に訪問した朝鮮における忠魂碑、牡丹台、七星門、玄武門、乙密台の日清戦争の戦跡、旅順における鶏冠山、北堡壘、白玉山、忠霊塔の日露戦争の戦跡、1931(昭和6)年に訪問した青島の日独戦跡イルチス砲台、北京の北清事変の戦跡などであった。戦跡では、案内者および当時の参戦者から戦争の様子について講話を受けた。

神社は合計7ヶ所を参拝した。中島三千男によれば「満洲国」建国まで「満洲」地方だけで神社の設置数は38社であり7ヶ所はそのごく一部であったが<sup>47</sup>、視察者たちが参拝した神社は植民地・占領地に建てられた主要な神社であった。この7ヶ所について具体的に述べると、台湾における開山神社(1896年設置)、台湾神社(1900年設置)、台南神社(1925年設置)、朝鮮における平壤神社(1916年設置)、「満洲」における奉天神社(1915年設置)、山東地方における青島神社(1919年設置)であった<sup>48</sup>。曾山毅の研究によれば、台湾における神社は「日本人のためだけでなく、統治上の政治戦略、皇民化政策推進を目的とし、1945年までに全島で68社にのぼった」<sup>49</sup>。とくに開山神社は台湾で建てられた最初の神社であり、母親が日本人であった鄭成功を祀ることによって日本の台湾侵略と植民地統治の正当化に利用しようとしたのである<sup>50</sup>。嵯峨井健によれば、植民地・占領地に神社が作られた目的は「一つには外地に居住する同胞の精神上的慰安のため、二つには現地民懐柔策のため、という二面性を内包」していたといわれるが<sup>51</sup>、神社参拝によって視察者たちは植民地・占領地における日本精神の浸透を感じたものと考えられる。

軍隊の視察については、1931(昭和6)年に北京の北支那駐屯歩兵隊1ヶ所の視察しか行われなかった。それは同隊の副官石田大尉が兵庫県出身であったた

め、彼から北京の事情を聴取し視察旅行に案内してもらったためであった<sup>52</sup>。視察者たちは石田から北京を視察する際の注意点、北京公使館の役割、北京の歴史、易姓革命の国としての中国の特徴についての講話を受けた。この北支那駐屯歩兵隊の視察は「支那の現在を日本国民がより探究してこそ日本帝国として国策樹立の上に自ら採るべき方針又は目標の定めらるべきものと信ず」<sup>53</sup>と視察者が述べたように、中国の現状を研究することが国策の遂行にとって重要であるという意識を視察者たちにもたらした。また視察者たちは、「規律厳肅なる我帝国軍隊に異国で相見え然も英、米、佛、伊等の諸列強国の駐屯部隊と相対峙して其堂々たる威容を示して居るのを見ては少なからず愉快に且力強い感じがした」<sup>54</sup>と自国の軍隊の強さを誇りに感じていた。

### 3 現地の人々との交流

視察者たちは各視察都市に滞在する日本人と精神的に交流を行った。それらの日本人とは領事館員、兵庫県人会員、現地の日本人教師が中心であった。中国で排日運動が高まっているなか、また言葉も通じない異国の地で視察旅行を順調に進めることができた背景には、「地獄で仏とは斯る時の感じをや云うのであろう。我々は未見の異国に而も排日や革命騒ぎのやかましい此の港に来て之からどうして無難に視察が出来るかを思う時、斯くも多数要職にある方々の態々船までお出迎え下さったことは実に一同の非常な光栄であり感謝であり」<sup>55</sup>と述べられたように、現地の日本人による支援があった。

次にこれらの日本人がどのように視察旅行を支援したのか、あるいはどのような役割を果たしたのかをみてみよう。まず領事館の役割は、兵庫県からの事前の連絡に応じ視察者たちに視察旅行に関する便宜を提供したことであった。前述のように、視察旅行の準備段階において兵庫県教育会はすでに視察地の領事館と連絡を取り、視察旅行への便宜提供を依頼した。それに応じて領事館側は視察者たちの出迎え、視察地に関する情報の提供、時局の説明、視察日程の指導などを行った。

兵庫県人会は、視察者たちの出迎え、視察者たちへの食事の提供、見学の案内などを担当した。ほと

んどの都市で、視察者たちは現地の兵庫県人会が主催する宴会に参加した。視察者のなかにはかつての教え子とも出会い興奮している場面もみられた。たとえば1928（昭和3）年に廈門で視察団の団長森棟二は、御影師範学校附属小学校の教え子であった中津賢一に出会い、「幼より当地に渡航して数十年間苦心経営今や南支に於ける日本人の豪商として認められていると云う事実は何を訓ふるであろうか。吾人は斯かる海外発展の第一線に立てる成功者を県下郷党に報告するの愉快を感謝するものである」<sup>56</sup>という感想を述べ、視察地での兵庫県人の活躍を喜ぶとともにその業績を県民に伝えようとした。

そのほか視察者たちは台湾総督府視学、寧波の税関長、北支那駐屯歩兵隊の兵庫県出身の軍人1名、旅行会社であるジャパン・ツーリスト・ビューロー（JTBの前身）から便宜の提供を受けた。また現地の日本人教員は、視察者たちの送迎や視察場所の案内、とくに教育機関の状況を説明する役割を果たした。このように、視察地における日本人の支援が視察旅行を成功させる要因であった。

このように現地の日本人と頻りに交流を行っていたのに対し、原住民との直接的な交流は少なかった。たとえば1928（昭和3）年に台湾の角板山蕃童教育所を視察した際、「三十余名の蕃童は先生である巡査と共に我台車にまっはり別れを惜しむさまは実に涙ぐましい」雰囲気の中で、「台車が動き出すと可愛らしい内地人ソックリの面持ちで両手をさし上げて万歳を絶叫して追って来る」<sup>57</sup>と、視察者は台湾原住民の子どもに温かく見送られた場面を書き記した。そこには二つの問題が含まれていた。一つは、原住民の子どもたちが視察者たちを歓迎するということは、台湾原住民が日本の植民地支配に服しているのを意味していたことであり、いま一つは「内地人ソックリ」という表現にうかがえるように、台湾原住民に対する日本への同化政策の実があらがっていることのアピールであったことである。

また台湾原住民との交流について、次のような場面も書き記された。視察者の一人が「土人の赤ん坊を抱き上げ」、「不安気な土人の母達も流石に笑顔を作り土人共がよってたかつて喜ぶのであった。矢張り人情は何処も同じである」<sup>58</sup>というものであった。

そこには「文明人」としての日本人と、「文明」度の低い「土人」の台湾原住民という歪んだ認識が存在していた。つまり「土人」の子どもを抱き上げることは、「文明人」である日本人が「土人」の台湾原住民に「博愛仁慈」を注ぐことを意味しており、「文明」度の低い彼らに対して寛大であるべきだという植民地宗主国の国民としての優越感がそのような歪んだ認識を生み出したと考えられる。

#### IV 視察者たちが学んだこと

##### 1 植民地に対する認識の再確認

視察者たちは視察旅行をとおして何を学んだのだろうか。視察報告書によると彼らは視察地に関する既得の知識を実際に照らし合わせ、視察地に関する従来の印象を改めて認識することができた。視察者たちがとくに注目したのは、台湾の原住民や「満洲」における自然環境であり、以下この2点について詳しくみておこう。1928(昭和3)年に台湾の原住民が居住している角板山を視察した視察者は、次のような感想を述べた<sup>59</sup>。

生蕃に付いては初め中等学校の地理書にも無智蒙昧の土人で其の性獐惡喜んで人をとって食うと書いてある位で、常に真裸体で険しい溪間を猿の如くに馳せ廻るのでその辺に行くのは極めて危険であると恐れられたものである。実は我々も此の度の旅行に付て蕃地に入るのは甚だ怖れられたのであった。処が今回実際に蕃界には行って見て其の謬り伝えられたことの多いのに驚いたのである。

この感想から次の2点を読み取ることができる。

第1点は、台湾原住民に対し教科書などを介して「無知野蛮」という認識が日本社会に存在していたことである。山路勝彦の研究によると、台湾原住民に対するこのような認識は、1871(明治4)年に沖繩・宮古島民69名が台湾最南端の恒春半島にあるパイワン族の居住地域(現在の屏東県牡丹郷)に漂着し、そのうちの54名がパイワン族によって誅首される牡丹社事件をきっかけに形成され<sup>60</sup>、以降「無知野蛮」というイメージが徐々に日本社会に根付いてい

った。中等教育地理教科書にも「蕃人は生蕃と熟蕃とを問はず、曠味なる習慣を持し、殊に、そのうちの生蕃は、未だ全く王化に霑はず」と台湾原住民の未開化の状態が書かれた<sup>61</sup>。このように視察者たちは台湾原住民に対して、野蛮未開の認識をもち不安を抱えながら角板山を視察したが、実際にみた原住民は教科書に書かれたような野蛮な人間ではないという認識を持った。視察者は、これに基づいて台湾原住民に対する従来の誤った認識を訂正すべきであると主張した。

第2点は、この感想に含まれる問題点についてである。一見原住民に対する従来のイメージを訂正しようとする記述であるが、そこに台湾総督府が視察者に期待する意図が存在している。つまり角板山で原住民の生活を視察させるのは台湾総督府の考えであり、その考えのなかに視察者たちに原住民の農業や教育機関を視察させることによって、「野蛮人」を文明化した総督府の統治業績を視察者たちに認識させるという意図が存在していたのである。

視察旅行によって、視察者は「満洲」に対しても改めて認識することができた。次の感想をみてみよう<sup>62</sup>。

人は満洲と云えば何処でも彼処でも荒寥たる原野のみの如くに想像している。処が事實は決してそうではない。それは小唄鴨緑江節に依って間違つた想像をたくましくするからである。一渡れば荒漠南満洲——など云うからである。処が鴨緑江を渡つても何処にも荒漠たる処は見られないのである。即ち安東から奉天までの鉄道は百七十一哩四分であつて、其の間には橋梁が二百余、隧道が二十五あるのである。故に此点から考えても平野ではなく山国なのである。

この感想は上述の台湾原住民に関する記述と同じように、従来の認識を実際にみた状況と照らし合わせることによって新たな認識を得るという図式であった。この場合、「満洲」が平野か山国かということが問題なのではなく、鉄道、橋梁、隧道という社会資本の整備が日本の統治のもとで進行したということ視察者たちに感得させる点が重要であった。

このように、視察者たちは視察旅行をとおして植民地に対する従来の認識を一変させ新たな認識を得たが、それは植民地支配の実があがっていることを視察者たちにアピールするためであった。

## 2 視察報告書に表われた視察者たちの中国観

視察報告書に表われた視察者たちの中国観をみると次の2点の特徴があった。第1点は、中国の古典文化への尊崇と現実の中国人に対する蔑視観が同時に存在したことである。1931（昭和6）年の視察旅行の際、視察者たちは孔子の第77世の子孫孔徳成に面会する機会を得た。その孔徳成についてある視察者は「僅か十二歳の童子であるが実に円満玉の如き風豊をそなへて、其の挙措進退の高雅なことは徐ろに二千数百年前の大聖人の面影を偲ばせられ、吾々は一種名状すべからざる深甚の感に打たれた」<sup>63</sup>と述べ、孔子の子孫に対する尊敬の念を示した。その一方で、山東省から北京へ向う列車のなかで、視察者は「車内に『請勿随地吐痰』（勝手に痰を吐くな——筆者注）と掲示してあるが、無学文盲の支那人には何の効能もない」<sup>64</sup>と述べ、中国人は車内の標示さえも読めない「無学文盲」の民であるとの認識を示した。

また中国の民家、食事の処、店舗の看板、史跡などに書かれていた文字を見て、視察者は中国を「美辞の国、文字の国」と感心したが、「国民教育を受けるものが一〇%乃至三〇%である。無学の民がこの堂々たる遠大の文字を如何にして解するか」<sup>65</sup>と疑問を呈した。視察者たちは、中国の伝統には感心しつつも、現実の中国人に対しては「無学の民」であると認識していた。

北京で万里の長城を視察中、視察者はある茶店を訪れ「茶瓶は秦の時代から一度も洗った事がないといった様な不潔極まる骨董品、茶碗はと見れば各所に負傷して薄黒く垢じんでいる。知ってか知らずかいや呑むは呑む」<sup>66</sup>と述べた。次の視察地へ向う列車に乗った際にこの視察者は、「関外から涼風颯々として三千年の臭を吹き送っていた。火車満員、混雑も混雑まるで震災当時の汽車よりもひどかった。暑さと異様な臭気に耐えられぬ」<sup>67</sup>と、車内の不潔に不快感を表した。

注目したいのは、「秦の時代から一度も洗った事がない」と「三千年の臭」という表現である。万里の長城を見学したばかりの視察者は、万里の長城から受けた中国の長い歴史に対する感銘を逆用し、皮肉をまじえて現実の中国人の人々の生活に蔑視観を示した。このように中国の伝統や古典文化に対する尊崇の感情と、現実の中国人の生活や「無学文盲」に対する侮蔑感という対立する二つの中国人観が視察者たちには存在していたのである。

第2点は、視察者の中国観に先入観が存在していたことである。奉天の慈善施設である同善堂は視察旅行で必ず立ち寄るところであり、その目的は「利己」的な「支那人」が経営する慈善施設がどのようなものであるかを確認するためであった。つまり視察者たちは中国人が利己的であるという先入観をもって視察旅行に臨んだ。同善堂に対してある視察者は、「世界にも一寸例を見ない社会的慈善機関である。世界一の総合的社会救済施設と言ひ得る。一人の乳児に一人の乳母を附添はし我が子の様に育てている様など見ただけでも感激せずにはいられない。徹底した社会事業が日清戦争以前から経営されていることを聞いて驚かされたのである」<sup>68</sup>と述べ、その施設やサービスの充実さに感心した。しかしその観察の視点は、「利己的の支那にして、其の半面に此の施設、外人も来り見るものが多い」<sup>69</sup>と述べたように、「利己」と「慈善」がいかに並存しているのかという興味本位のものであった点に注目すべきである。

それはラマ教の法輪寺に対する感想にも表われていた。視察者は「天地渡化の額に対して喇嘛教の原始的自然的なるをしのぶ、人間性の真髓を如実に表現せしめし所に、素朴な蒙古・西藏人の宗教的信仰を伺ふ。喇嘛塔の崩れかかれる上に鳥の憩ふ荒廃、閑寂古雅の趣津々たるものがある」と、法輪寺の宗教な雰囲気感動しつつ、香代を期待している僧侶に対して、「露骨に物質的なるは支那としては当然のことらしい」<sup>70</sup>という見方を示した。ここには中国人が物欲的であるという先入観そのままに視察旅行でみた中国のことを解釈していることがうかがえる。

また曲阜では視察者が仕事以外の時間を利用して旅館の治安を担当しお金を稼ぐ警官に対して、「利にぬけ目のないものはやはり支那人式だ」<sup>71</sup>という認

識を示し、中国人の生活の厳しさを理解せず、ただ物欲的であるという先入観で警官を軽蔑した。

上述のように、視察者たちは古典文化と現実を分離して中国をみており、あるいは先入観をもったまま中国をみていた。視察者たちの先入観は視察旅行によって証明されさらに強くなり、その意味で視察旅行は視察者たちに新たな中国観を与えるというより、既得の中国観をいっそう増幅させるものとなった。

## V おわりに

本稿では、「満洲国」建国前において兵庫県教育会が実施した小学校教員の「支那満鮮視察旅行」を取り上げ、次の4点を明らかにした。

第1点は、実施経緯と実施目的である。兵庫県教育会ほかの道府県の実施状況に触発され小学校教員を対象とした「支那満鮮視察旅行」事業に着手した。その目的は、当初はほかの道府県と同じように「教員ノ知見ヲ拡充スル」ことであったが、徐々に教育的実地調査と中国の実情を認識することに重点が置かれた。

第2点は、視察旅行の実態である。視察ルートは台湾・中国南方、「満鮮」、江南地方、北京・山東地方と多岐にわたった。視察場所は、1906(明治39)年の視察場所であった戦跡、史跡、教育機関、資源地だけではなく、新たに神社と博物館が加えられ、とくに史跡の視察が最も重視された。

第3点は、小学校教員が視察旅行から得た新たな認識である。小学校教員は視察旅行をとおして従来の台湾や「満洲」に関する「野蛮」「荒涼」という認識を払拭し、教育、交通、農業などの社会資本が発展し文明化へ進んだ認識を得たが、その認識には植民地統治の業績が上がっていることを宣伝する傾向があったことである。

第4点は、視察報告書に表われた小学校教員の中国観の特徴についてである。一つは、中国の古典文化への尊崇と現実の中国人に対する蔑視観が同時に存在したことであり、いま一つは、小学校教員の中国観に先入観が存在していたことである。視察旅行は小学校教員に新たな中国観を与えるというよりも、既得の中国に関する先入観をいっそう増幅させるも

のとなった。

今後の課題としては、小学校教員が視察旅行から得た見聞をどのように伝えたのかを明らかにすることをあげることができる。本稿では、小学校教員が視察旅行から得た見聞を教育現場でどのように子どもに伝えたのか、それが子どもにどのような影響を与えたのかについても解明することを念頭に入れながら研究を進めたが、資料的な制約から具体的にどのように伝えたのかについては解明することができなかった。今後視察旅行に参加した小学校教員が所属していた学校を調査するなどして新しい史料を発掘し考察を深めたい。

## 【注】

- 戦前日本人が行った中国東北地方を中心とする旧植民地・占領地への旅行であった。時代の変遷や視察地の相違により、「満韓旅行」「満鮮旅行」「鮮満旅行」「満蒙旅行」「鮮満支旅行」などさまざまな名称で呼ばれた。種類別をみると、「支那満鮮観光旅行」「支那満鮮修学旅行」「支那満鮮視察旅行」があった。本稿では小学校教員を対象とする「支那満鮮視察旅行」を取り上げたため、小学校教員の「支那満鮮視察旅行」と統一して表記する。行論の都合上、場合によって本視察旅行、視察旅行と略記する。
- 本稿では、表記について野村章『満洲・満洲国 教育史研究序説』エムティ出版、1995年、16頁～17頁の解釈に賛成し、以下は「満洲」、「満洲国」で統一することにする。なお本稿における地名の表記について、今日の社会状況と照らし合わせる時不適切であると考えられるものも少なくないが、研究論文という性格上、資料に見られる表記をそのまま使用する。
- 管見のかぎり、北海道、秋田、岩手、宮城、福島、山形、富山、長野、東京、千葉、神奈川、愛知、京都、大阪、兵庫、山口、愛媛、長崎などの県教育会が小学校教員を対象とした「支那満鮮視察旅行」を実施していた。これは、教育ジャーナリスト編『教育会機関誌日録』『信濃教育』『教育時論』『京都教育』『満鮮の旅』(千葉県教育会、1927年)、『満鮮を見る』(岩手県教育会満鮮学事視察団、1934年)、『教育週報』『帝国教育』、アジア歴史資料センターなどの資料から確認した結果である。
- 渡部宗助「中学校生徒の異文化体験——1906年の『満韓大修学旅行』の分析』『国立教育研究所研究集録』21、財団法人学会誌刊行センター、1990年、有山輝雄『海外観光旅行の誕生』吉川弘文館、2002年。いずれも、1906(明治39)年の視察旅行において陸軍省と

- 文部省が小学校教員の「支那満鮮視察旅行」へ処置を行っていたことに言及していた。
- 5 『兵庫教育』第477号、1929年7月15日、58頁。
- 6 『兵庫教育』第459号、1928年1月15日、121頁。
- 7 『兵庫教育』第493号、1930年11月15日、79～80頁。
- 8 注7)に同じ、78頁。
- 9 注7)に同じ、81頁。
- 10 詳細は、拙稿「1906(明治39)年における『満洲教員視察旅行』に関する研究」『神戸大学大学院人間発達環境学研究所研究紀要』第1巻第2号、2008年3月所収論文を参照していただければ幸甚である。
- 11 『兵庫教育』第474号、1929年4月15日、74頁。
- 12 『兵庫教育』第441号、1926年7月15日、1頁。
- 13 注7)に同じ、78頁。
- 14 注7)に同じ、79頁。
- 15 注7)に同じ、63頁。
- 16 『兵庫教育』第481号、1929年11月15日、視察報告書「鮮満視察旅行日記」(99頁～115頁)、99頁～100頁。
- 17 『兵庫教育』第489号、1930年7月15日、視察報告書「支那江南の旅」(105頁～127頁)、105頁～106頁。
- 18 『神戸又新日報』第15853号、1930年6月5日。
- 19 『兵庫教育』第503号、1931年9月15日、視察報告書「北支那を語る」(63頁～79頁)、70頁。
- 20 注16)に同じ、1929年視察報告書、99頁。
- 21 『兵庫教育』第466号、1928年8月15日、視察報告書「海外視察旅行記(その一)」(1頁～18頁)、2頁。
- 22 山路勝彦『近代日本の植民地博覧会』風響社、2008年、264頁。
- 23 『兵庫教育』第467号、1928年9月15日、視察報告書「角板山の詩的幽境に遊ぶ」(72頁～81頁)、79頁。
- 24 注23)に同じ、1928年視察報告書、75頁。
- 25 注23)に同じ、1928年視察報告書、79頁。
- 26 『兵庫教育』第468号、1928年10月15日、視察報告書「海外視察旅行記その四 金門湾のコロナスと厦門」(55頁～64頁)、61頁。
- 27 『兵庫教育』第472号、1929年2月15日、1928年視察報告書「海外視察旅行記その六、若き若き港スワトウ」(94頁～101頁)、96頁。
- 28 注16)に同じ、1929年視察報告書、99頁。
- 29 『兵庫教育』第479号、1929年8月15日、125頁～129頁。
- 30 山路勝彦『近代日本の植民地博覧会』風響社、2008年、2頁。
- 31 注30)に同じ、2008年、123頁。
- 32 『兵庫教育』第482号、1929年12月15日、視察報告書「鮮満の旅」(42頁～85頁)、48頁。
- 33 注32)に同じ、1929年視察報告書、49頁。
- 34 『兵庫教育』第490号、1930年8月15日、視察報告書「支那江南の旅」(105頁～127頁)、105～106頁。
- 35 近代日中関係史年表編集委員会『近代日中関係史年表』岩波書店、2006年、463頁。
- 36 注17)に同じ、1930年視察報告書、111頁。
- 37 注17)に同じ、1930年視察報告書、123頁～124頁。
- 38 注17)に同じ、1930年視察報告書、117頁。
- 39 注17)に同じ、1930年視察報告書、115頁。
- 40 『兵庫教育』第503号、1931年9月15日、視察報告書「北平第二日」(105頁～111頁)、111頁。
- 41 『兵庫教育』第503号、1931年9月15日、視察報告書「神戸から青島へ」(81頁～88頁)、81頁。
- 42 注40)に同じ、1931年視察報告書、111頁。
- 43 注17)に同じ、1930年視察報告書、118頁。
- 44 注23)に同じ、1928年視察報告書、78頁。
- 45 『兵庫教育』第483号、1930年1月15日、1929年視察報告書「満鮮旅行記」(66頁～79頁)、70頁。
- 46 注45)に同じ、1929年視察報告書、74頁。
- 47 中島三千男「旧満洲国における神社の設立について」木場明志『植民地期満洲の宗教』柏書房、2007年所収論文、141頁。
- 48 神社の設置時期については、「海外神社(跡地)に関するデータベース」、神奈川大学21世紀COEプログラム第3班課題3を参照した。  
<http://www.himoji.jp/database/db04/permalink>。
- 49 曾山毅『植民地台湾と近代ツーリズム』青弓社、2003年、297頁。
- 50 注49)に同じ、298頁。
- 51 嵯峨井建『満洲の神社興亡史』芙蓉書房、1998年、20～24頁。
- 52 注19)に同じ、1931年視察報告書、79頁。
- 53 注40)に同じ、1931年視察報告書、106頁。
- 54 注40)に同じ、1931年視察報告書、106頁。
- 55 注26)に同じ、1928年視察報告書、57頁。
- 56 注26)に同じ、1928年視察報告書、59頁。
- 57 注23)に同じ、1928年視察報告書、79頁。
- 58 注23)に同じ、1928年視察報告書、75頁。
- 59 注23)に同じ、1928年視察報告書、72頁～73頁。
- 60 注30)に同じ、山路勝彦、43頁。
- 61 大関久五郎『中等教育地理教科書』(文部省検定済)日黒書店、1916年、154頁。
- 62 注16)に同じ、1929年視察報告書、110頁。
- 63 『兵庫教育』第503号、1931年9月15日、視察報告書「曲阜から北平へ」(93頁～105頁)、97頁。
- 64 『兵庫教育』第503号、1931年9月15日、視察報告書「万里の長城と明の十三陵」(112頁～115頁)、112頁～113頁。

- 
- <sup>65</sup> 『兵庫教育』第551号、1931年9月15日、94頁。  
<sup>66</sup> 注64)に同じ、1931年視察報告書、114頁。  
<sup>67</sup> 注64)に同じ、1931年視察報告書、114頁。  
<sup>68</sup> 注16)に同じ、1929年視察報告書、112頁。  
<sup>69</sup> 注16)に同じ、1929年視察報告書、112頁。  
<sup>70</sup> 『兵庫教育』第491号、1930年9月15日、71頁。  
<sup>71</sup> 『兵庫教育』第503号、1931年9月15日、視察報告書「曲阜から北平へ」(93頁～105頁)、95頁。